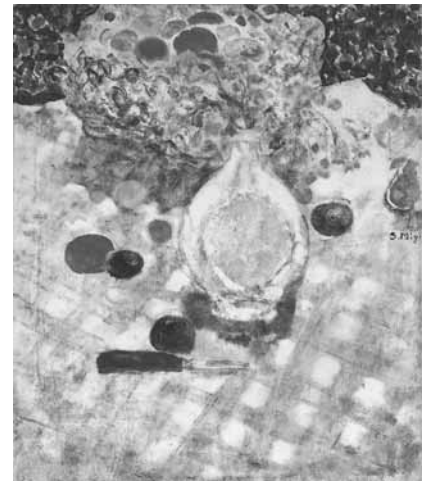


マチエールは語る。

「マチエール」とは「材料、材質」を意味するフランス語で、美術の分野では、画家の創意によって生み出された画面の肌合いや質感のことを指します。時期によって様々な表情をみせるマチエールに注目しながら、節子作品をお楽しみください。

初期・室内画のマチエール

後に「昔私はマチスを信仰に近いほど信奉した時代があつた。」^(注1)と振り返っているように、初期作品にはフォーヴィスムの画家アンリ・マティス(1869-1954)からの影響を受けた明るい色彩の作品が多くみられます。またピエール・ボナール(1867-1947)を特集した美術文芸雑誌『ヴェルヴ』から感銘を受けたという記述を残しており^(注2)、初期に静物画や室内画が生み出された背景には、子育て中だったという事情に加えて、身近なモチーフの中に美を追求したボナールへの共感が窺えます。《静物》等に見られる格子模様のテーブルクロスは、ボナールの室内画にも度々登場するモチーフです。この作品は、キャンバスが透けるほどごく薄いマチエールで仕上げられており、明るい色彩をより引き立て、軽妙な印象を見る者に与えています。



《静物》1942年 ©MIGISHI

苦悶する思いを封じ込めたマチエール

49歳で初渡仏を果たした節子は帰国後、一人軽井沢の山荘に籠って、画業に専念できる環境に身を置きました。何者にも邪魔されることのない画家としての生活が守られた一方、50代になっていた節子は身体的・精神的な不調に見舞われ、これまでの人生を振り返っては後悔や^{さんき}慚愧の念に駆られる苦しい日々を送ります。その中で生まれたのが「飛ぶ鳥」シリーズでした。《火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)》では、繰り返される自問のように絵具が何層にも塗り重ねられ、砂なども混ぜ込んでざらついたマチエールを表出しています。画面を掻き削った跡は、自身との葛藤の痕跡のようです。浅間山とそこに飛来する鳥をモチーフに描いたというこのシリーズは、この時期の節子の心象風景ともいえ、どの時代の作品とも異なる様相を呈しています。



《火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)》1960年 ©MIGISHI

節子にとってのマチエール

1968(昭和43)年、63歳で節子は長男一家とともに再びフランスへ渡り、以降約20年間を彼の地で過ごしました。最初は南仏カーニュ、その後ブルゴーニュ地方のヴェロンにアトリエを構えて拠点とし、ヨーロッパ各地にスケッチ旅行に行くこともしばしばありました。そうした中で節子が魅せられたのが、ヨーロッパに根付く「石の文化」でした。水上都市ヴェネチアでは、水面を映しながら様々な表情をみせる石の壁を描き、ギリシャ古代劇場の石組みからは、古代人の歓声を想像しました。ヨーロッパ各地の石や壁が見せる表情を、積み重なった歴史の層のように重厚なマチエールで描き出しています。

節子自身は、マチエールについて次のような言葉を残しています。

この壺は私でなければ描けない壺、この果実は私でなければ出せない色彩、この花のマチエールは、即ち私の肉体の肌あひである。この画背の声は私の魂の触角である。私の作品には、もろもろの私の生活のうめきや、嘆き悲しみ、苦悩のさまざまが織りなされ埋めつくされてゐる。^(注3)

この中で節子は、絵画のマチエールを自らの肉体の肌合いと重ね合わせ、作家の身体と不可分な存在として語っています。「色彩の画家」として知られる節子ですが、マチエールについてもまた、大きな関心を払って制作に取り組んでいたことが読み取られます。



《細い運河》1974年 ©MIGISHI

(注1) 三岸節子「人間勉強」『黄色い手帖』求龍堂、昭和58年、56頁
(注3) 三岸節子「私の世界」『黄色い手帖』求龍堂、昭和58年、109頁

(注2) 三岸節子「近代の表現」『美神の翼』求龍堂、平成3年、38頁